

し梁啓超として一書無からざるべからず謂ふ胡適の勸誘と蔣方震の著歐洲文藝復興時代史とに刺戟せられて著述せしものにして清代思潮の大勢より説き起し清朝學の來由、黎明運動者としての顧炎武、科學者としての梅文鼎、戴震、惠棟の學風、段玉裁、王念孫王引之父子の學派、經學の隆盛、王夫之、黃宗義、萬斯同以下錢大昕、何秋濤等の史學、阮元謝啓昆等の地志、その他地理學金石學清學分裂の導火線の經學今古文の争に在る事、今文學運動の中心者としての康有爲等を叙し、支那人の學問的本能に富みよく清代學術の隆盛を來たしたることを論述す（上海商務印書館發行）

Les Grottes de Touen Houang. P. Pelliot

三冊（敦煌窟發見物寫真集）

本書は佛の Pelliot 氏が今回の大戦に陣没したる Robert Guigniot 氏と共に佛國文部省、佛國中亞探險協會、佛國亞細亞學會、Academie des Inscriptions et Belles-Lettres 等の後援の下に千九百六年より千九百九年に亙る四個年に試みたる敦煌窟調査の結果獲得する所々莫集品の複製並に洞窟の寫真集にしてこれ主として該旅行の同行者なる Charles Nouette 氏の實寫せる現地寫真を本とし之に加ふるに將來品の精巧なる複製を以てせしものなり其の大型紙四ツ切の大きさのものは圖畫記録等の存する發見資料の複製を印刷し八ツ切の大きさのものは古鈔本、古記録断片の複製其他を以てす其の資料たるや Sogdiana, China 並に善惡因果經、サ

ンスクリット、チベット語の佛敎問答等中亞に關する空前の珍らしきものを包括し言語學的にも歴史學的にも地理學的にも宗教學的にも將た哲學的にも貴重なるものたるや論を須たす就中故 Gauthio 氏の苦心の結晶なる Sogdiana 語文法並に其の語原的研究は最も傾聴に値すべく二百餘面の圖版は實に東洋史研究者の寶典たるに止らず好學の士の看過すべからざるものとす（以上那波）

彙 報

●帝國學士院授賞式

帝國學士院にては去五月二十二日東京美術學校講堂に於て恩賜賞、帝國學士院賞及び桂公府記念賞の授賞式を行ひたるが其中第一部に於て此光榮に浴せし受賞者左の如し
恩賜賞

日本佛敎史の研究（著書） 文學博士 辻 善之助

●京都帝國大學第十二回夏期講演會

京都帝國大學に於て學術普及の爲め例年催し來りし夏期講演會は來八月一日より第十二回講演會を開催して一般有志の聽講を許

すべしといふ、講演科目中史學地理學に關係あるもの左の如し、
(詳細は京都帝國大學講演會宛照會の事)

人及藝術家としてのラゲチル

文學部助教授文學士 成瀬 清

現代文化人の文化

文學部教授文學博士 米田庄太郎

國際聯盟

法學部教授法學博士 跡部定次郎

經濟生活觀

經濟學部助教授 作田 莊一

新カント派の社會哲學

經濟學部講師 恒藤 恭

科 外 講演

財政より見たる戦後の列強

經濟學部教授法學博士 小川郷太郎

人類最古の文化

文學部教授文學博士 濱田 耕作

未定

同 西田幾太郎

● 史學研究會

例會 五月七日午後一時半より文學部第五教室にて開催左の講演あり。

一、榻布考

會員文學士 那波利貞君

榻布は史記貨殖列傳に唯一度のみ現るゝ一種の織物にして其後の記載には見えず唯漢書貨殖傳には答布と異字を以て示されあるが此の材料の何なるかに就きては未だ定説あるを聞かず孟康等は之を白疊也と謂ひ從つて尙正熒は木綿織物なりとせるが支那に於ける木綿の傳來栽培の沿革より見る時は漢以前に木綿が然かく安

價に販賣生産せらるゝ筈なければ其の木綿織物に非ざることを疑な
容れずと論じ尙ほ白疊の語に就きて種々所説を述べ最後に思ひ附
として今日我邦に存する柵織物の名なるタフの名の榻布より傳り
て殘れるものならむ歟云々

一、南加縱斷紀行

會員文學博士 島 文次郎君

カリフォルニアに於ける西班牙の教會堂の遺蹟巡禮の意味にて
San Francisco を出版し Dolores の教會堂を訪ひ次で Monterey に
至る此處の教會堂は第二番目に建設せられ歴史的價値に富めるも
のにして其の風景は天下に冠絶し祖師 Junipero Serra の墓碑あり
さて其の經歷、事業を述べ次いで San Geronimo 附近の有様 San
Gabriel の Triy 教會堂の現状を紹介し東の方面の手練の途を取り
たる道程を更に西の方面海岸線の途を取りて引き返し第一番に成り
し San Diego の教會堂の歴史並に Oakland に於ける詩人 Miller
の遺址を訪へり云々

來會者五十餘名、席を本部樓上談話室に移して茶話會を開き鳥
博士將來の風景寫眞繪葉書を贈賞し午後五時半散會せり

● 讀史會

例會 去三月二十日午後六時より卒業祝賀を兼ね學生集會場に於
て開催、出席者三浦教授江馬魚濱下川富森の語學士源中村井川及
島田等諸氏にして左の講演あり

一、淨土信仰の起源と其發達

源 豐 宗 君

先づ未來信仰に彌陀の淨土と彌勒の兜率天あることより先づ佛教の傳來後聖德太子までと太子より奈良朝末迄と平安遷都より鎌倉初期迄との三期に分ちて一々文獻を擧げ兜率より西方淨土聖僧より罪僧及び平民口稱に到る信仰の起源と變移發達とを論述せられたり

一、船岡山城趾に就いて

文學士 魚澄惣五郎君

船岡山城は應仁大亂と永正亂の兩度に丹波方面より攻め來る敵を防ぐ爲に築かれたることを前言して現今城趾の實測と應仁記とを結びつけて考ふるに築城術の未だ發達し居らざる當時としては大規模のものにして丘上に半永久的防備を設けしを見るべく塹濠の如き深濠あり鹿砦あり櫓あり完備を期せしも唯だ連絡の點に缺陷ある事を地圖につきて論述せられたり

例會 四月二十九日午後六時より學生集會場に於て開催、出席者三浦喜田兩教授江馬魚澄中村富森下川牧桑原の諸學士六人部中村井川勝峰別藤及島田の諸君にして左の講演あり十時散會せり

一 江戸時代前期の一富豪の生活

文學士 江馬 務君

先づ灰屋紹益佐野三郎左衛門重孝が徳川初期に於ける富豪の隨一たりしことより其の祖先は足利尊氏の軍忠狀をうけたる武勳の家なりしも後に丹波に下りて紺灰の間屋並に組合の長をなして資財多く、後京都に移り來り元和年間紹由の代に至て商業を廢して風流三昧に耽りしが其子紹益父の後を承け多能多藝にて、就中連歌蹴鞠茶道は何れも堂奥に入り畏くも後水尾院より「直透」の宸翰を賜りし程なりしこと名妓吉野を落籍して風流生活をなせること

を述べしこと其の子孫の傳ふる彼等兩人の遺物文書等の寫眞に就き一々詳細説明を加へらる

一、史學管見

文學博士 三浦 周行君

近時盛んに呼號せらるる文化史が未だ精神的方面を完全に表し屋らず國民史平民史の聲のみ高くして其實質の伴はざることを指摘し又マルクスの唯物史觀を以て國史の史實を論斷せんことこの危険なることを實證せられ更に進んで歴史の敘述法に及ばれ古文書古記録尊重の歴史に對する階評は必ずしも當らざるも吾人は千篇一律なる研究態度を棄て、今少しく自由不拘束の境地に立脚し史料の合理性危險性を識別して巧にこれを運用し社會構成の全般を捉へて完全なる史的研究所の大成に努むべきのみと論結せられたり

例會 五月二十七日午後六時より學生集會場に於て開催出席者三浦喜田兩教授魚澄中村牧下川桑原の諸學士及び橋川井川加藤の諸君にして左の講演あり十時過散會せり。

一、國史上より見たる日本改造運動の將來

文學士 法學士 牧 健二君

先づ現今資本々位の社會を勞働中心の社會に改めんとする改造運動を概説し日本に於て資本主義の現社會を出せる變遷は西洋と軌を一にせりさいひ更に内容に進みて歴史の持續性と變化性とは改造運動に於ても見らるべしこは階級意識の鮮明と自己の力の自覺によりて始まり將來益々自覺の高まりと社會の煽動は其勢力を増長せしめ結局これが成功を見え可しと結論せられたり

一、朝鮮海印寺訪問

橋川 正君

去四月大邱より高靈を経て海印寺に訪問せしが門前に三重石塔あり解脱門を入れれば本堂大寂光殿を始め釋尊堂窮玄堂九光樓明月堂の建造物や禮拜石石槽等の石造物も存すれども高麗版一切藏經六千五百七冊と同版木八萬六千有餘の整然たるは感す可く尙雜版を稱して未整理物中に貴重本を見出さる當寺はもと華嚴宗にして三寶本山中の法寶本山に當り今尙二百餘人の僧侶が昔乍らの僧室生活をなしつつあり云々まで寫眞につきて説明せられたり